

---

# 空色の虚空

赤月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空色の虚空

### 【Nコード】

N6380C

### 【作者名】

赤月

### 【あらすじ】

そこには大きな城があった。真つ青な天に浮いた、大きな緑の大陸。大陸に聳え立つ白亜の城。何故、空に城があるのか。人々の興味は尽きず、ついに人間は空へと浮かぶ手段を手に入れた。

## 一話 空に浮かぶ城

それは常に空にあった。

「退屈だな」

朔はそう呟いて、足下を見下ろす。

国で一番高い建物の、一番高い場所に朔は立っていた。足元から、扇状に広がる家々。地平線上、遠くに見えるのは低い山々。背後を振り返っても、そこには鬱蒼とした森が広がっているだけ。別段、面白味のある風景ではない。

「朔様、お願いですからそこから降りて下さいまし」

同じく、何の面白味も無い台詞が下からかかる。朔はちらりと声の方向を見やった。見慣れた初老の男の顔が、疲れたようにこちらを見上げている。相手も注意をすることに飽いているのだろう。それならば、放っておいてくれれば良いのだ。

朔が立っているのは、国で一番高い建物　王宮の一面に建つ、一番高い場所　見張り台の屋根の上、だった。だが、足を滑らせても遙か眼下の地面に叩きつけられることは無い。せいぜい注意してきた男の立っている見張り台に落ちるのが関の山だろう。そう危険なことではない。

「朔様」

男がもう一度、名を呼んだ。子供では有るまいし、屋根に昇ったくらいで、文句を言われる筋合いは無い。朔は男を無視して、天を仰いだ。下には見るべきものは無い。

そこには大きな城があった。

真っ青な天に浮いた、大きな緑の大陸。大陸に聳え立つ白亜の城。

何故、空に城があるのか。

唐突に容赦なく空に浮いているあの物体に、人々の興味は尽きない。日によって、浮いている方角や位置が変わるのもまた良い。それは時に頭上に移動し、日光や雨を遮ったりもするのだ。

昔から皆は空を見上げてきた。今も空を見上げている。朔がこうやって天を仰いでいるこの時にも、きっと誰かが空を見上げているだろう。空に浮ぶ城を見るために。

その城には、神が住んでいるらしい。全知全能の神が、人々を見下ろしているのだ。宙に浮く大陸こそが、神の存在を、神の力を証明しているのではないかと人々は言う。

他の人間は、あれこそが黄泉の国だという。死んだ人間は魂だけの存在になり、軽くなってあの城へと昇っていくのだと。あの城に辿り着けた魂だけが、永遠の命を得るのだと。

羽の生えた天使や悪魔だけが暮らせる場所だと言う人間もいる。我々とは全く別の人種が、空の上で暮らしているのだと言う人間もいる。

「朔様、危険で御座います」

朔は僅かに舌打ちしてから無造作にそこから飛び降りる。下に居た男は、飛び降りた朔に向かって驚いたような顔を見せ、微かにため息を付いて見せた。

「もう少し御身を大切になさってくださいませんと」

「怪我をするとお前が困るからな」

朔は皮肉気にそう言うってから、窓から屋内へと入る。ここが自分の部屋だった。

国王に希って与えてもらった一室だ。ここは時計台や見張り台として使われている建物であり、本来なら、人が寝泊りするような場所ではない。だが、朔はここが気にいっていた。空に最も近いというのが良い。王宮にも部屋を持っていたが、そこは息が詰まってし

ようがなかった。

「怪我をなさると、陛下が悲しまれます」

「ふん、王は俺の顔など覚えてもいないだろうよ。俺だって兄弟全ての顔を覚えてはいない」

質素で小さな部屋には不釣り合いなほどの立派な長椅子に身体を沈めながら、朔は口の端を上げる。

歴代の国王の中でも無類の女好きとされる現王・眞は、正妻二人と数多の側室を持ち、王子・王女と呼ばれる人間だけでも軽く四十人はいる。朔はその十二番目の子に当たった。王子だけで言うと、上から九番目だ。それは、王位継承権の九位を持っているということになるが、いくら朔でもそんな順位にまで王冠が回ってくるとは思っていない。周囲もそう思っているだろう。だれも朔に王子たる振る舞いを期待してはいない。

「そつえば近々、王宮で何かあるのだったか」  
足を組み替えながら、朔は男の顔を見上げる。

朔のお目付け役のような役割を振られているこの初老の男は、見るからに冴えない顔をしていた。王子王女の教育係　　というかなる子守か　　も、第五王子くらいまでは国の賢者を集めてその任につけているような印象があるのだが、朔の辺りにまで来ると寧ろうだつの上がない人間が選ばれているような気がする。王子や王女の一人一人に有望な人間を付けていては、人材の無駄遣いになるとも思っただろうか。

「はい。明後日、日出の間に集まるようにと、王宮から知らせが届いております」

「ふうん？　何か面白い催しでもあれば良いがな。また姉妹の誰かが他国に嫁に出されるからといって、兄弟姉妹全員の祝辞を聞かされるはめになるのは御免だぞ」

朔はそう言つて、目にかかる鋼色の髪をかきあげた。

だが、他国に嫁ぐことの出来る王女と言う存在は、跡取りとなる王子並に優遇される。他国と縁を築く意味でも、他国に与える人質としてでも、他国に借りを作る時にでも、婚姻と言うのは有効になるのだ。だから第九王子などという朔よりもよっぽど、第二十王女の方が役に立つはずである。

朔はそう思いつつ、その考えを鼻で笑う。

こうも嫁げる娘が多いと、閉口しているのは押し付けられた他国の方だろう。

## 二話 空に託した願い

ここは、地に這い蹲る城

「俺が……いえ、私が」

朔はそう言つて、中央に進み出た。

人々の視線を受けながら、陛下に向かって跪く。だが頭は下げずに、朔は平然と父親でもある国王を見据えた。国に二つと無い豪華な玉座に座った王は、こちらに声をかける前に隣に立っていた宰相へと顔を寄せる。宰相の唇が僅かに動いた。

「綾様の長男である朔様です。第九番目の王子にあたります」

声はほとんど聞こえなかったものの、彼の唇から推察するにだいたいそのような言葉であるだろう。綾というのは朔の母の名だ。一時期はそれなりに陛下の寵を貰ったらしいが、美しさ以外に取り立ててとりえも無かった母は、すぐに飽きられてしまったらしい。

陛下は納得したように頷いた。

「そうか、綾の。言われて見れば良く似ておる。美しい青年になったな」

「有難う御座います」

朔は嘲笑しそうになる顔を隠すように、深々と頭を下げる。普段ならそのまま皮肉気な顔を陛下に向けるのだが どうせ自らに向けられた嘲りに気付くような、聡い王ではない 今回は機嫌を損ねるわけにはいかなかった。朔は顔をあげる。

「その任務、私にご命令ください」

「ふむ。……しかし、危険な任務となる。生きて帰れる保証はないのだぞ」

「構いません」

朔は不敵な笑顔を陛下へと向ける。

陛下の近くにいる兄たちが、哀れみとも嘲笑ともとれる表情でこ

ちらを見下ろしていた。彼らには朔の行動が、陛下に取り入るための小賢しい策に見えているのかもしれない。危険な任務に進んで就くとは物好きなことだと思っているのかも知れなかった。

そう、玉座に近い彼らには解るまい。

朔の抱えている慢性的な退屈と無為に過ごす日々に対する後ろめたさ。

「必ずや、陛下のお役に立って見せます」

命を賭してでも。朔はそう言って陛下の顔を見上げる。

朔の命などいくら賭けても良い。このまま退屈な日々を送るくらいなら、死んだ方がましなのだ。どうせ生きていても、王宮に縛られて暮らすだけの人生。

「それならば、これはお前に任せよう。 天空の城の探査に、朔を向かわせる」

陛下の言葉に、朔は始めて心から頭を下げた。

空へと旅立つことは、長年の人類の願いだった。

空に浮ぶ城の正体を知りたい、と。人間たちは空へと舞い上がる方法を模索してきた。

最近になって、近隣している国がその手段を手に入れたらしい。

朔は部屋に戻り、それを初老の男に語る。他に語る相手を持たなかった。

「要するに、大きな風船のようなものらしい。下で火を燃やし、暖かい空気を溜める事によって浮力を得る。その風船の下に籠を付け人間が乗れるようにしたものだ。瑠国ではそれを気球と呼ぶらしい」

「しかし何も、朔様がそのような危険な任務を負わなくとも……」

「危険……危険か。瑠国では既に五基が天空の城へと向かったが、一基たりとも戻ってこなかったらしいな」

朔は口の端に笑みを浮かべながらそう言う。杯を差し出すと、男



は赤い液体を注いでくれた。赤酒は瑠国での名産品だ。この讃国でも酒は作っているが、味は赤酒に遠く及ばない。他にも隣国に及ばない物は多くある。生産性で言っても技術的な観点から言っても、だ。

天空の城に瑠国が先に辿り着いてしまったら、何かしらの技術や思想や力を手に入れてしまうかもしれない。隣国と、これ以上の差を作ってしまうことをこの国は恐れているのだろう。だから必死で瑠国の技術を盗み、気球を作ったのだ。

「朔様には自信がお有りなのですか？」

「自信？ そんなものは無いな。剣を使えば勝てるような相手でもないだろう。その風船に穴が開けば地面に叩きつけられて終わりだし、城には何かがあるのか皆目検討もつかない」

朔の台詞に、理解が出来ないとでも言う風にも男は首を振った。

だが男にしてみれば、朔が死んで御役御免になった方が良いはずだ。いずれ王冠を争うような王子に付いたお目付け役ならば色々な特典もあるが、朔の面倒を見る役目など、貧乏くじを押し付けられたのと変わりはない。それは朔の下にいる十名ほどの王子にしても同じだろうが。

「陛下は反対なさらなかったのですか？ 他の殿下方は？」

「国を代表するような計画だ。真剣さを瑠国や他国に見せびらかす意味でも、王子を使いたかったんだろうよ。……こういう時には子が多いのも使い捨て出来て便利だな」

朔はそう言つて皮肉気に笑った。

将来を囑望された年長の王子たちは、こんなつまらぬ任務で命を捨てる気にはなれないだろうし、年若い王子たちは、まだ絶望を知らないほどに幼いのだろう。だが朔の場合は。

己の命の価値など、一度の冒険で燃え尽きても良いと思えるほどに安いものだ。

### 三話 空へと続く道

青い空を翔るように

ふわりと朔の身体は浮き上がった。

みるみるうちに人々の姿が小さくなる。そこには陛下を始め、国の名高い役人が集まっていた。足下を見下ろすことよりも空を見上げることを好む朔だが、ぽかんと口を開けて見上げている人間を見下ろすのは楽しいものだと思った。

何より、陛下や王太子を足下に見下ろすことが出来る。彼らが豆粒ほどに小さくなるのを見送ってから、朔は初めて同じ籠に載っている男を見た。

未だ若い青年。朴訥とした、気の良い小市民と言った印象の男だ。彼は黒い瞳をこちらに向けた。希望に燃えていると一目で解る、綺羅綺羅とした瞳。王宮では腹黒そうな策士然とした人間の瞳ばかりを見慣れているだけに、朔は僅かに居心地の悪さを感じた。

「殿下、ご一緒できて光栄です！」

「……君達がこの気球の設計をしたそうだが」

朔の言葉に、はい、と彼は声を弾ませた。嬉しそうに続けてくる。「長年、あの城へと行くための乗り物についての構想を練ってはいましたのです。幸い、僅かですが王宮から研究費も頂いていましたね。ですが今回、瑠国の気球の設計図が手に入りまして、私たちが研究していた浮船を改良することが出来ました。こんなものを作らせていただいた上に、その乗員にまでしていただいて、こんなに嬉しいことはありません！」

そうか、と朔は答える。

地上は遙か足下だった。だが相変わらず、空に浮いた城が近づいてくる気配は無い。

「他に乗員の希望者はいたのか？」

「え？ ええ、それはもう沢山。ですが、皆は快く自分に譲ってくれました」

につこりと笑いながら青年は言った。

だが。実際は巧く押し付けられたのだろつと朔は思う。進んで試運転に命を捧げたがる人間はそう居まい。純粹にあの空に浮ぶ城に行つてみたい人間はいえ、それは大勢いるだろつ。だがそれは、朔達が成功してから後でも良い。

こんな泥舟に乗るのは、自分の成功を盲目的に信じているこの青年のような馬鹿か。

もしくは自分の命を賭け金にしても空に手を伸ばしたい、朔のような愚かな者か、だ。

「計算では、あの城にはどれくらいで着く？」

朔は腰に佩いた剣に手を置く。

天空の城に向かった瑠国の気球は五基とも発見されていないらしい。国内・国外、どこを搜索しても見つからなかったと聞く。それは、気球が墜落してはいないことを示している、と誰かが言っていた。つまり、それらは天空の城に辿り着いてから消息を絶つたのだろつ、とその誰かは説く。

敵がいるのかもしれない。

そう考えると、朔の心は高揚する。何故かは解らない。別段、戦いが好きだと言うわけでは無いのだ。それこそが退屈な日常を変えてくれると思つていいのかもしれない。

「そうですね、あと四半刻くらいではないでしょうか」

「四半刻か」

今まで、どれだけこの日を待ったことか。

それを考えれば、四半刻などあつと言う間に過ぎてしまふことだろつ。

目の前には一面の野原が広がっていた。

蒼い空にぽっかりと浮んだ緑の野。そして視線を上げると、あの白亜の城がそこにあった。下界から見ていたときと、全く変わらない姿で。

朔の心は躍った。手を伸ばしても届かないと思っていた空の上にある城が、すぐそこに、触れる位置にまで来ているのだ。青年は気球を操作して、緑の大陸にそれを下ろした。

どすん、と。重たい音を立てて、朔が乗っている籠が天空の大地に触れた。朔はひらりと籠から飛び降りる。柔らかい草の感触を、靴の裏を通して感じた。そこはまるで、御伽噺に出てくるような風景だった。

敷き詰められた緑の絨毯、所々に咲いている花々が鮮やかな色彩を与えている。一点の曇りも無い真っ白な城は、完全な左右対称に作られているようだ。王宮に暮らし、立派な建物を見慣れている朔でさえも思わず目を見張ってしまうような綺麗な城だった。朔達を出迎えるように、正面に見える大きな城の扉は開け放たれている。「凄い……ここが天空の城？ 本当に？」

独り言のような青年の言葉に、朔は黙って頷いた。自分も誰かにそれを肯定してもらいたいような心境だったからだ。幼い頃から……物心付いた時から、常に見上げていた場所に自分はいなのだ。どんな世界があるのかと、何千回と思い巡らせた場所にいる。

「行くぞ」

朔は剣を手にし、扉へと向かう。人々が追い求めた真相を確かめるために。

#### 四話 空に己を映す

此処に在るのは地獄か樂園か

「ここは……」

広い玄関を抜けた先にあった部屋の戸を開けた途端、朔の足は止まった。

扉から、延々と続く真紅の絨毯。その両側には女達が頭を伏せて礼を取っていた。絨毯の長さだけ、女たちも続いている。それは、遙か遠くに見える玉座のような豪華な椅子にまで伸びた。誰も座っていない、空漠の玉座。

「おや、いらっしやい」

だがその玉座から声が聞こえた。婀娜つぱく、痺れる様な甘い声。

いつの間にか、誰もいなかったその椅子に人が座っている。抜けるように白い肌に良く似合う、紫色の着物を着た女性だ。着物と言っても朔達の国で女性が着ている様な綿で出来た衣服ではなく、光沢のある薄く滑らかな布で作られた衣服だった。しかも袖は肩の部分だけが無く、白い肌が肩から胸元にかけて露わになっている。

年の頃は二十代半ばと言ったところか。女の紅い唇が笑みの形を作る。

「此方へ」

そう言われて、初めて朔は驚愕した。

椅子までは遠く離れている。座っているのが男か女かの判別が着かなくとも可笑しくないほどの距離だ。それなのに何故、彼女の表情、彼女の着物の柄までもが間近で見ているかのように判別できるのだ？ 声も、耳元で言われたように良く聞こえる。

「ここは……神の国か？」

「さて。神とはお前にとってどのような存在を指すのじゃ？ この

ような存在か」

女の声が聞こえたのと同時に、朔の目の前に玉座があった。玉座に座った女が居た。朔は一步も動いてはいない。それなのに、一瞬のうちに場所が移動している。

知らず、剣を持った指先が震えていた。これは紛れも無く、人知を超えた力だ。

朔は思わず口の端を上げる。ずっとその場に跪く。

「この下にある、讃国の使いとしてここにやって参りました。王子、朔と申します」

「ほう、王子か」

女はそう言つて楽しげに笑った。

「王というのは下の世界では神のような存在だと聞く。やってきた人間は全て歓待しているが、お主は特に歓待することとしよう。

皆のもの、宴の準備をせよ」

女が言つと、伏礼をしていた女達が一斉に顔を上げた。顔を上げ、長い裾をはためかせながらその場を開ける。代わりに男達が手際良く円卓を運び込んだ。その周りに椅子を並べ、赤い布を卓にかけた途端、その卓に溢れんばかりの料理が乗っていた。美味しそうな料理から、湯気が上がる。食欲をそそる良い匂いがする。

何も無い卓の上に一瞬で料理が乗る様子を、呆然と眺めていた朔と一緒にいる青年に向かって、女主人は、さ、と促して見せた。

「座るが良い。下界の話聞かせておくれ」

ここは夢のような世界だ、と。

共に来た青年は、何度も朔に言つた。ここに居座ってしまったと言つ瑠国の使者もそう言つた。ここは夢のような世界だ。饗される贅の尽くされた食事。絹や金糸で編んだ衣服を着る事も出来るし、世話をしてくれるのは美しい妙齡の女性ばかり。希望すれば寢室を共にすることも出来るらしい。極上の生活。ここに居ては時間の感

覚も忘れてしまう。

彼らは皆、口々にそう語る。

だが朔は退屈だった。

飯にも王子の端くれだ。豪華な衣服も贅沢な食事も綺麗な女にも慣れている。

豪華な暮らしを望むのなら、王宮を出て見張り台の下に部屋を構えたりはしない。

豪華なだけの暮らしに満足が出来るのなら、そもそもこんなところにまで来てはいない。

始めこそ、未知の力を使える彩　ここの女主人の名だ　や天空の城に暮らす他の女達との会話を楽しんでいたが、やがてそれにも飽きた。彼女たちは何も語らないのだ。何故、この城が空を飛んでいるのか。どうやって料理が出されるのか。どうしたら朔を瞬間移動させることが出来るのか。尋ねても、「そういうものだから」としか言わない。本当に知らないのかもしれない。

鳥が空を飛べるように、魚が水の中で暮らせるように、彼女たちは自然に此処で暮らしているのかもしれない。彼女は自然に力が使えるのかもしれない。しかも、彼女達が知っているのはこの小さな大陸の中のことだけだった。美しい彼女達が語るのは、常にこの城の中で起こったことだけだ。違う女から、同じ話を何度も聞かされる。

正直言って、うんざりしていた。

所詮、楽園という場所はこの程度の物か。

朔は自嘲するように口元を歪める。そう思うと、途端に城の外壁が色褪せて見えた。

下界から見上げている時はあんなに光り輝いて見えた緑の野も、

今はただの雑草が茂っているようにしか見えない。何故あんな大きなものが空を飛ぶのだろうと思つて心躍らせていたこの大陸も、歩いてみるとごく小さなものだと解る。王宮の敷地ほどしかないだろう。

長年、朔の心を占めていた何かがぽつかりと抜け落ちたような気がした。

大事な何かが、さらさらと指の間を流れ落ちる。それは青臭い言葉で言えば、夢とか希望とか言うものかもしれない。手を伸ばせば掴める様な気がしていた夜空の星が、本当に掴めてしまったことに對する衝撃と落胆、絶望。

朔は天を仰いだ。

何よりあそこには、空を仰げば天空の城があつた。光りを受け輝く城が。だがここには何も無い。

全てを吸い込むような虚空の空だけ。

「帰るか」

空に浮ぶ城を見上げられるあの場所へ。朔は一人、そう呟いた。



## 最終話 空に続く永遠の刻

ここは、空に繋がれた城

「ほう、帰りたいと」

彩はそう言つて切れ長の目を細めた。口元は楽しそうに笑んでいる。

「ええ。父王に報告をせねばなりませんから」

「そう急くことは無いだろう。もう少し、ここにいれば良い」

朔は玉座のような場所に座っている彩に対し、首を振ってみせる。  
「いいえ、既に長らく御邪魔してしまいました。ご迷惑をおかけしたことを思います」

「気にすることは無い。妾たちも好きでやっているのさ」

「有難う御座います。では、またお会いできることを楽しみにしております」

朔はそう儀礼的に言つて周りを見回した。

一緒に来た青年がいない。彼には朝のうちから国へ帰ると伝えていたはずだ。挨拶もせず、先に気球へと行つてしまったのだろう。朔はくると彩に背を向けた。女達は、来た時と同様に赤い絨毯の端で伏礼をしている。誰も追ってくる気配は無かった。

外へ出た朔は、気球の傍に立っている青年を見て絶句した。

彼が持っているのは大きな太刀。それを地面に向かって一心に叩きつけていたのだ。

「おい、何を！」

朔は男の手から太刀を取り上げると、青年を思い切り突き飛ばした。小柄な彼は為すすべ無く転ぶ。朔は足下を見下ろした。そこには、ずたずたに切り裂かれた気球があった。

「何を」

啞然とした朔は、何とかそれだけを言った。青年は怯えたようにこちらを見上げる。

「だって……だって、気球が無ければここにずっといられる。ここですつと暮らせるから」

「何、を馬鹿なことを！」

「殿下には申し訳ありませんが、私は……俺はずっとここで暮らすと決めたんだ」

怯えた表情をしながらも強い瞳で見上げてくる男を、朔は思わず衣服を掴んで引きずり起こしていた。ぎゅつと襟首を締め上げる。

「お前はそれでいいかもしれないが、俺は」

「お止め」

強い声が朔の動きを静止させた。いつの間にか隣に彩が立っている。彼女は朔が掴んでいる男に向けて、柔らかに笑んだ。

「そちらの坊の気持ちは妾には良く解る。ここを離れたくないのであるう？　王子が国に帰りこの城のことを報告して大勢の人間が此処へ来るのが怖かったのじゃろう？　だが坊のことは今後も客人として手厚く歓待するゆえ、心配するでない」

「は、はい」

彼女の台詞に嬉しそうに笑んだ青年を、朔は地面に叩きつけた。

彩が魅惑的な笑みを見せる。

「お主の気持ちも良く解る。じゃが、ここもそう悪い場所ではないぞ」

「……他に帰る方法は無いのか？」

不思議な力を使える彼女たちなら、と。朔は目を細めた。腰に佩いた剣にも手をかける。最悪の場合は力に物を言わせてでも、帰る方法を聞き出してやる。

「下界に下りる方法か？　そんなものがあれば、とつくに妾が試しておるわ」

口の端を上げながら、彩は言った。その笑顔は鏡で見慣れた朔の

自嘲と同じ要素を含んでいるように思えて、思わず朔は剣を抜きそびれた。努めて冷静を装って聞く。

「どうということだ？」

「こう言う事さ」

彼女がそう言うと同時に、強い力に朔の身体は弾かれた。身体がいつも簡単に吹き飛ぶ。飛ばされながら、足下に見えた下界の様子は心臓が止まりそうになった。朔の身体は大陸から離れている。次は当然、下へと落ちていくだろう。襲い来るはずの落下の感覚に身を縮ませた朔だったが、いつまで経ってもその時がやってこないことに気付く。

「……どうということだ」

宙に浮いたまま、朔は呆然と口を開いた。

眼下に広がるのは遙か地上の風景。しかし朔の身体は落ちていない。

「彩の力を使っているのか？」

「いや。妾は何もしちゃいない。お主が落ちないというだけさ」

そう言う、彩も大陸から一步外へと足を踏み出した。だが、彼女は当然のように何も無い宙を歩いている。

彼女は笑った。今度ははつきりと解るほどに自嘲的な笑みだった。「一步でもここに足を踏み入れれば、誰であろうと出ることは出来ぬ。お主であろうと妾であろうとな。ここは流刑場だからな。」

空に繋がれた牢獄さ」

その紫水晶のような瞳に映る色は、見たことが無いほどに深い。

「お前は……此処は一体」

「お主が言うところの神という奴に、不興を買ったのは何百年前のことだったかの。あれは女好きの男でな。気に入った女を見つけては傍に寄せ、気に入らぬ振る舞いをした女は片っ端から此処に飛ばされた。時々、男も飛ばされてきたかの」

そう言う、女はくつくつと晒った。

「……彩はどのくらいここにいる？」

「歳も取らぬし年月など数えてはおらぬな。三百年……いや、四百年というところか」

女は深い紫色の瞳を細めた。

生を受けてから二十年間。朔が退屈に飽き、命を捨てても良いと思った年月がそれだ。それが彼女の場合は少なくとも三百年。到底、朔に絶えられる年月ではない。

彩は口の端を上げる。

「どうせお主もここから出られぬ。歳も取らぬ。死ぬことも出来ぬ。せいぜい仲良くやろうではないか。最近では下界から人間も来るようになって、妾達は嬉しく思っているのさ。百年も同じ顔を見ていると飽きてくるからね。なに、神の気が変わってここから妾達を出してくれる気になったら、お主も何とかなるじゃろうよ」

そんな言葉を聞きながら、朔は絶望的な想いで下界を見下ろした。

地に這い蹲っている色とりどりの街並みが、酷く羨ましく思えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6380c/>

---

空色の虚空

2010年10月8日15時44分発行